Nightmare

かつおぶし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Nightmare

【Nコード】
N8875R

【作者名】
かつおぶし

【あらすじ】
高校生になった裕樹の元に、
父の昔の知り合いからメールが来る。
頼まれた「荷物」は、実はとんでもないモノだった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

普通の男子高校生の主人公と、ロボット達。
彼らは父の知り合いの助けを借り、次々と襲い来る試練に立ち向かう。

全ては、今もどこかで暴走している仲間を止めるために。

人物説明（前書き）

※作者は機械や科学には詳しくありません。
ほぼ想像でカバーしてます。
勘違いなどが多いと思いますが、読める人だけどうぞ。

人物説明

人物説明

佐山　裕樹　（サヤマ　ユウキ）

高校１年生。
姉が一人いる。父親は事故で、母親は病気で既に他界。
言葉遣いは丁寧な方。

佐山　由香　（サヤマ　ユカ）

高校３年生。
裕樹の姉。

斉藤　一也　（サイトウ　カズヤ）

高校１年生。
裕樹の友人。背が高く、１９０?以上もある。佐奈とは幼なじみ。

石島　佳奈　（イシジマ　カナ）

高校1年生。
裕樹の友人。背が低い。一也とは幼なじみ。

伽狭　陽　（カキョウ　ヨウ）

裕樹の父親の、昔の仕事仲間。
世界初の家庭用人工知能ロボットを開発し、のちに裕樹の父親と共に「ナイトメアシリーズ」を作った。
裕樹のことを「少年」と呼ぶ、若干変わった人。

No．1　日常

やっと中学校の入学式が終わった。
都会の子はみんなああなのだろうか。

今年中学校に入学した【佐山　裕樹】は、ため息をついた。
それほどでは無いが、田舎から引っ越してきた彼にとって、
都会の子供はどうやら刺激が強すぎた（？）らしい。
彼が入学した学校が、都会でも少し荒れている学校というのもあるが。

「言葉遣いも荒いし、服装なんか・・・」

あの入学式の光景を思い出し、ついため息が出そうになる。
それでも、なんとか友人は出来た。
入学式で隣の席だった男子と、その友人らしき女の子だ。
周りと比べると、そんなに派手でないが、どことなく垢抜けた感じがしていた。
「今日は俺が夕飯の当番だったよな。」
家で待ってる姉の存在を思い出し、彼は早足で歩いていった。

「ただいまー。」

「おかえり！どうだった、新しい学校？」
ドアをしめると、奥から姉が出てきた。
【佐山　由香】。

高校3年生で、綺麗に整えられた髪の毛を後ろで結んでいる。
背は平均より少し高めで、モデルのような体型だ。
昔、街を歩いていて、芸能事務所にスカウトされた事もある。
俺より少し高い視線を感じつつ、靴からスリッパに履き替える。

「悪くは・・・ないかな。友だちも出来たし。」
「そう！よかったじゃん。」
嬉しそうに微笑む姉に、俺も疑問を投げかける。
「俺より、姉貴は？どうだった？」
「うん・・・。何か、たくさん話しかけられてちょっと疲れちゃった。」
「そっか。まぁ、話しかけられないよりいいよ。」
そういうと、俺は夕食の支度に取りかかった。

ジャガイモの皮をむきながら、俺は姉のさっきの言葉を思い出した。
姉は、性格はともかく、容姿は可愛いほうだ。
おそらく、話しかけられたのは女子より男子の方が多いだろう。
男嫌いの姉にとっては、難儀な話だ。
（まぁ、俺が気にする事でもないか。）

「おはよう、佐山。」
「おはよーゆうくん。」

「おはよう。斉藤、石島。」

教室に入ると、あの2人が挨拶をしてきた。
入学式に友だちになった、【斉藤　一也】と【石島　佳奈】だ。
背がものすごく高い斉藤と、背が低い石島ではまるで凸凹コンビだ。

「ねーねー、今日の体育何か知ってる？」
佳奈は時間割を見ながら聞いてきた。
おおかた、また書き忘れでもしたんだろう。
「あーバスケじゃ無かったっけ？」
俺が言うと、
「え・・・俺、体操服持ってきてないんですけど。
保健室から借りてこようかな？」
「「・・・サイズ、ある？」」
どうみても１９０？以上ある斉藤には、無理だろう。
かと言って、友だちにもそんな背の高いヤツは居ない。
結局、斉藤は、制服の上を脱いでバスケをしていた。

No．2　きっかけ

家に帰り、携帯をチェックしていると、
姉や斉藤達の他に、知らないアドレスからメールが来ていた。

（ダイレクトメールの類かな？）

一応中身を覗いてみると、そこにはある人の名前が書いてあった。

父さんの友人であり、ロボットに関しては世界的権威を持つ人。
伽狭　陽。

昔、父と一緒に同じ研究をしていた人だ。
・・・十数年前、家庭用人工知能ロボットを世界で初めて作り、革命を起こした人。
昔はよく遊んでくれたりして、俺の携帯にもアドレスは入っていた。
だけどもう何年も会っていない。
いったい、何の用なのだろうか。

『悪いんだが、君のお父さんの部屋にあるトランクを、1人で取ってきて欲しい。
そして君の部屋に置いといてくれ。後で私が取りに行く。』

そこでメールは終わってた。
メールの用件は、たいしたものではない、ただの荷物の移動だった。

（だけど1人で？・・・どういう事だ。）
どこか引っかかる文章。
それ以前に、とんでもなく怪しい香りがする。

「これ、しなきゃいけないのか・・・？」
父の部屋は、すこし離れた別荘にある。
何でも実験に没頭するために、本家とは離れた所に別荘を造ったらしい。
別荘といっても、見た目や中は、実験場みたいになっている。
あまり近づきたくない所だ。

なぜなら、父は実験中の事故で亡くなったからだ。
薬品の加減を間違えたらしい。

そんな場所には、生きたくないのが本音だが、
父の友人がわざわざメールしてくるほどだ。
行くしかないのだろう。

「・・・面倒だな・・・」

No. 3　別荘（前書き）

No．3　別荘

メールをもらった十数分後、俺は父親の別荘の前にいた。
門の前で、しばらく躊躇したが、周りに誰もいない事を確認すると、
門に手をかけ、玄関に足を踏み入れた。

さすがに父親の別荘、しかも誰もいない家に「お邪魔します」とは
言わなかったが、
どうも他人の家のような雰囲気がして、堂々とは入れない。

部屋の中は薄くほこりがつもっている。
あれからしばらくここには寄りついていないので、当たり前だろう。
靴を履いたまま行くか、脱いでいくか迷ったが、
靴下がほこりで汚れるだろうし、どうせ誰も住まない家だ。
土足で入ったって問題はないだろう。
アメリカなんて土足は当たり前、と思いながら足を進める。

階段を上がり、２階に登る。
ぎしぎしと音が立ち、今にも床が抜けそうだ。

（確か、右側が父さんの部屋だったよな。）

右側を見ると、銀色のプレートがかかった扉があった。
プレートには『ＹＵＳＨＩ』と書かれている。
確かに父さんの部屋だった。

扉を開けると、意外とスムーズに開いた。
そっと中をうかがい見ると、薄暗い部屋の中に、机や本棚、ベット
があり、

至る所に本や書類が散乱していた。

「・・・捜し物見つかるか？これ。」

No．４　父の部屋

あまりの部屋の壮絶さに辟易していた俺だが、
とりあえず頼まれたモノを捜し始めた。

確かメールにはトランクと書いてあったはずだ。
しかし、この惨状では見つけ出すのは相当難しいだろう。
パッと見ただけでも、床の３分の２以上が物で見えない。

恐る恐る中に踏み込むと、かび臭い匂いがした。
とりあえず、そこらへんにある書類をどかすと、
そこここで小さい雪崩が起きた。
埃が舞って、もの凄く呼吸器官にはよくなさそうだ。

我慢して探っていると、部屋の奥に、大きな四角い物が見えた。
近づいてみると、確かに黒い大きなトランクがあった。
「これか・・・。」
傍まで行って、トランクの取っ手を掴む。
これでやっと帰れる、とトランクを運ぼうとした。

が。

（お、重い・・・！！）

何だこの重さ。
あまりの重さに、一旦トランクを降ろした。
まさか、人とか入ってないよな・・・

親父、ずっと実験狂だと思ってたが、とうとう人をモルモットとかに・・・
いやいや、ありえん。

だが、この重さはなんなのだろう。
陽さんには悪いが、ちょっと中を確かめさせて貰おう。
ほんとにちょっとだけ、蓋を少し開けるだけだ・・・
トランクの金具を外し、そっと蓋を開ける。
そこにあったのは、ただの球体だった。

なんだこれ。

トランクのなかには、クッションが敷かれ、そこに球体があった。
白いソレは、両手で抱えられるほどの大きさだ。
ジッと見ていたが、それが何なのかまったく分からなかったので、
俺はまたトランクを閉じて、父の部屋をあとにした。

No. 5　昔の知人

「それにしても、本当に重い・・・！！
何であんな小さい球体が、こんなに重いんだ・・・？」
自転車で来なくて良かったと、心底思った。
悪戦苦闘しながら、家への帰り道を歩いて、ようやく家にたどり着くことができた。
つ、つかれた・・・。
思わずへたりこみそうになったが、家の前の人影を見て、背筋を伸ばした。

「よぉ、元気か少年。」

玄関の前で煙草をふかしながら、こちらを見てにやりと笑った女。

彼女こそ、【伽狭陽】、その人だった。

スーツの上に、赤いコートを羽織った女。
身長は高く、１７０?以上はあるだろう。
長い髪を巻き、颯爽とたたずむ風情は、まさにキャリアウーマン。
オフィス街はこの女王の独壇場になるだろう。

しかし、ここは少し寂れた住宅街。
まったく彼女とは違和感あふれる組み合わせになっている。

「・・・お久しぶりです。陽さん。」
「まったくだ。」
ククッと笑うと、彼女はこちらへ歩いてきた。

「いきなり頼んで悪かったな。重たかったろ、ソレ」
くい、とあごでさしたのは、俺の持っていたトランク。
「ええ、まぁ・・・。」

さすがに、本人の許可の前に開けてしまいました、なんて言えないが、
あの球体は何なのか知りたい俺は、無知のふりをしてさりげなく聞いてみた。
「これ、中身なんですか?」
「それか?そうだなぁ、その前に、少し家に上がらせてもらえるか?」
「いいですよ。」

彼女は俺からトランクを受け取ると、

あれだけ苦労して持ってきたトランクを、ひょいと持ち上げて歩き出した。

・・・あの人の腕力は、どうなっているんだろう。

もしかしたら、人間じゃないのかも。

No．６　トランクの中身（前書き）

ちょっと短め？

No．6　トランクの中身

家に上がると、誰もいなかった。姉はどうやら不在らしい。
俺の部屋へ案内して、椅子を勧める。

「さて、コレがなんなのか？って話しだったよな？」
「はい。あんまり重いから、人が入っているのかと思いました。」
「人ねぇ。ククッ、案外当たってるかもな、少年。」

案外当たってる？
中には、球体しか無かったはずだが。

「少年、開けてみろ」

トランクを開けると、やはり先ほどの球体があった。

「それは、私と君のお父さんが作った、人工知能ロボットだ。」
「人工知能ロボット？それって、今売られてるようなやつですか？」
「いや・・・。あれは家庭用だ。
　これは使用目的が違う。」

陽さんは、煙草を吸い終わると、携帯灰皿に捨てる。
そしてそれをスーツにしまうと独り言のように呟いた。

「それは、私と君のお父さんの最後の【共作】。

・・・戦闘用人工知能ロボット、『ナイトメアシリーズ』。
そいつは２体目、ｎｍｓ－０２だ。今は仮死状態に入っている。」

No.7　真実

「戦闘用・・・ロボット？」
「あぁ。詳しく説明すると長いんだがな・・・。
実はそのシリーズは不完全だ。

・・・君のお父さん、実験中に亡くなられたのは知ってるよな。」
「はい。それが何か？」
陽さんは、俺の目を見て、言った。

「君のお父さんは、ナイトメアシリーズ最終機の暴走に巻き込まれて死んだ。」

「暴走に巻き込まれて、死んだ・・・？」
「そうだ。
最終機は攻撃系では一番だったからな。
ただの人間は瞬殺だ。一応、防御系をつけておいたんだが・・・」

それって。
父さんは、自分が作ったモノに、殺されたって事か・・・？

「これから私は、君には酷な事を頼むかもしれない。
嫌だと思ったら、嫌と言ってくれても構わない。」
「何を、するんですか？」

「・・・その、今は球体になっているｍｎｓ－０２。
それは、最終機に次いでもっとも攻撃力の強いロボットだ。
そいつと契約して、今も尚、
暴走していると思われる最終機を見つけて欲しい。」

それは、つまり、自分の父親を殺したヤツを見つけろって事か。
いや、それ以前に、契約・・・？

「・・・いきなり言っても、理解できるわけないな。
疑問もあるだろう。また後日、返事を聞きに来る。
それまで考えや質問をまとめてくれ。
もちろん、この申し出を断ってもいいからな。
この依頼は、とてつもなく危険だ。命に関わる。そこをよく考えといてくれ。」
そう言うと、陽さんは椅子から立ち上がった。
「じゃ、邪魔したな。」

その瞬間。

俺の視界が、歪んだ。

No．8　起動

「なっ！？」

めまいかと思ったが、それは勘違いのようだ。
なぜなら、陽さんもその場でうずくまっているからだ。
「・・・っ、なんだコレ！？」
「やられたか。まさか2号機のことがこんなに早く伝わるとは・・・！」

そうしているうちに、俺の部屋はどんどん歪み、
そして限界まで歪みきったところで、瞬時に視界の歪みは消えた。

しかし、そこはもう俺の部屋ではなかった。

暗い空間がどこまでも続き、時折、流星群のようなものが降りそそぐ。
そして、どこからかオルゴールのような音色が流れ始めた。

「陽さん・・・なんですかコレ！？」
「ｎｍｓ－０４か。
厄介なものにぶち当たっちまった。
少年、2号機、ちゃんと持ってるか。」
「なんとか・・・。」
俺の手は、確かにトランクの取っ手を持っていた。
「少年、悪いが迷って貰うほどの時間は無いようだ。

このままだと、５分ももたずに死ぬ。
・・・２号機と契約してくれ。」

はっきり言って、ものすごく迷った。
【契約】というものを、よく理解せずに、それを行おうとする事に。
嘘がきらいな陽さんが、【危険】【命に関わる】と言ったということは、
それは相当なハイリスクだという事だ。

・・・それでも、今ここで、すぐに死ぬわけにはいかなかった。

その決断が、後で俺の人生を大きく狂わせることになるとは、思わずに。

「どうすればいいんですか？」
まっすぐ陽さんの目を見ていった俺を見て、陽さんは一瞬悲しそうな目をしたが、
すぐにいつもの冷静な表情に戻った。
「そのトランクを貸してくれ。」
陽さんにトランクを渡すと、自分の手が触れないように持ち、俺の手に球体を押しつけた。

すると、球体が仄かに白く光る。

『コード認識中。Ｎｏ．Ｍａｓｔｅｒ確認。起動開始』
機械音が鳴り始め、どんどん光が強くなってくる。
そして光がひときわ強くなり。

『ｎｍｓ－０２。起動完了』

そこには、１人の少女が居た。

No．９　本体

「・・・え？」

さっきの球体から、女の子・・・？

「よし、なんとか成功したみたいだな。」

陽さんが安堵のため息を漏らす。

俺らの目の前には、１人の少女がいた。

腰ぐらいの白い髪の毛、肌も透き通るくらい白い。

その代わり、目は薄いピンクで彩られている。

服は真っ白なワンピースだ。

彼女はしばらく静止し虚空を見つめていたが、ふいに俺に視線を向けた。

『・・・現在状況、ｎｍｓ－０４のテリトリー圏内。攻撃を受けています。

どういたしますか？』

良く聞くと、少女の声に機械音声が混じったその声は、ほぼ人間と変わらない。

「すごい・・・これがロボット・・・？」

「少年、ぼんやりしてる暇はないぞ。

体が異常を感じてなくても、精神は確実にダメージを負っている。
このテリトリーから抜けだすには、
本体のｎｍｓ－０４を叩かなくてはいけない。彼女に攻撃命令を出してくれ。」

「攻撃命令？」
「なに、簡単なことだ。ｎｍｓ－０４を攻撃しろ、とか言えばいいだけだ。
今は、動かなくするか、能力を使えなくするか、だな。」
「はぁ・・・じゃぁやってみます。ｎｍｓ－０２。
ｎｍｓ－０４を行動不能にしろ。」

思わず上から目線で言ってしまったが、彼女は特に気にせずに、
『了解しました』

その瞬間、彼女の足下から光が放たれ、なにやら魔法陣のようなものが現れた。
彼女がそこに両手をついた後、魔法陣から手を離していくと、
手には、白く、彼女の身長ほどもある大きな鎌が握られていた。

刹那、彼女が跳ねた。
さっきまで彼女がいた場所は大きくえぐられている。
その中心にいたのは、長すぎて地面まで伝っている薄い紫色の髪をした少女。
濃い紫色の目は、違いなく白い少女を見据えていた。

「ようやく本体が出てきたな。」
「本体・・・あれが？」
「そうだ。あれがｎｍｓ－０４。この異常事態の元凶。」

こんな状況なのに、陽さんは楽しそうに笑う。
まるで、自分の娘の晴れ舞台を見ているかのように。

「さぁ、これからだ。
ナイトメアシリーズが【神の最高傑作】と呼ばれた所以を、見せてあげよう。」

Ｎｏ．９　本体（後書き）

いまいち話の展開が突飛に感じる・・・

No．10　暗示

まず動き出したのは、白い少女だった。
一瞬体勢を低くすると、凄まじいスピードで走り出す。

それと同時に、紫の少女も足下に幾何学模様を広げ、
目の前を右手でなぎ払うようなしぐさをする。
その一瞬で、彼女の右手には、５本のナイフが現れた。

紫の少女が、一本のナイフを投げつける。
高速で走っている白い少女は、それを鎌で軌道を逸らし、走り続ける。
それを４回繰り返し、とうとうナイフがつきた紫の少女は、
白い少女が走ってくるのを、何もせずに待っている。
そしてとうとう、白い少女があと数メートルにまで迫った時。

白い少女の全身に、傷が走った。

「なっ・・・」
「やはり、【トリック】か。」
思わず絶句する俺の横で、陽さんは動じていない。
「トリック？」
「あぁ、元々ｍｎｓ－０４は防御系のロボットなんだが、
　攻撃も少しはできる。あれは、４号機が持ってる技の１つだ。」

白い少女が、紫の少女に近づこうとするたび、傷が深くなっていく。

彼女の白い肌や服に、真っ赤なシミが次々と増えていく。

「何でああなってるんですか？何もないのに。」

「そりゃそうだ。あれは幻想だ。

さっきのナイフは、２号機に暗示をかける下準備だ。

おそらく【４号機に近づくと、傷つく】とでも思いこまされてるな。」

「思いこまされてる？」

まぁ、催眠術の一種だと思えばいい。

人間は、【そう思う】と、本当になってしまう事がある。

それを使った技だよ。

ロボットとはいえ、私達が創った人工知能だ。人間とそう変わらない。」

それだと、２号機は、あの４号機とやらに傷を負わせる前に、体がミンチになって終わりだ。

実際、２号機の見た目はほぼ真っ赤に染まりかけていた。

しかし、２号機はまったく引こうともせずに、さらに４号機に近づいていく。

「どうして２号機は、傷が深くなるのに、４号機に近づくのを止めないんですか？」

「・・・２号機を始め、ナイトメアシリーズは一切痛覚を感じない。

戦闘の時は邪魔になるからな。」

「じゃぁ、このまま・・・」

絶句した俺を横目に、陽さんは２機の闘いに目を向けたまま、言った。

「行動不能になるまで、動き続ける。」

俺たちが話してる間も、2号機は体中を切り刻まれている。
だが、陽さんは少しも顔色を変えなかった。

「そうあせるな。確かに4号機は少しは攻撃もできるが、
それはやはり【少し】だ。」

傷だらけの少女の足下が光る。
4号機も慌てて幾何学模様を浮かびあがらせるが、遅い。
ブチブチッと何かを引きちぎる音と共に、白い少女が一気に紫の少女へ詰め寄る。

「――戦闘に特化している2号機には、遠く及ばない。」

そして、白い少女は持っていた大鎌を、紫の少女の首に食らいつかせた。

No. 11　部屋

俺は、ようやく元の自分の部屋に帰ることが出来て、一安心した。

「あのまま首を切ったのかと思ったら、違うんですね。」

「あれはナイトメアシリーズ専用武器だ。

外装はなんともなくても、内部がズタズタになっている場合もある。

メンテナンスには時間がかかるぞ。」

椅子に腰掛けている陽さんは、４号機をチェックしている。

４号機をズタズタにした当事者は、あの少女の姿から、

トランクの時よりも小さい、十字架のような形をしたアクセサリーになっていた。

「ナイトメアシリーズって、全部こうなるんですか？」

「そうだな。

元々、要人の護身用に開発されたから、普段身につけても違和感がないようにデザインされている。

ただ、ナイトメアシリーズは扱いが危険すぎるとして、

開発当時は実用化の目処さえ立っていなかったが。」

適当に相づちを打ちながら、十字架のアクセサリーを見る。

確かに、ネックレスにでもすれば、そこらへんに売ってそうなのと遜色はない。

「少年、お前はこれから2号機の保有者になるんだ。
絶対無くしたり、落としたりするなよ。」
「分かってます。」

2号機に夢中で、半分上の空の俺に呆れたのか、陽さんはため息をついた。

さっき陽さんが買ってきてくれたチョーカーに、2号機を通す。
こうすれば、無くしたりはしないだろう。

「明日、この場所に来てくれ。
これからの事について、詳しく話す。」

4号機のメンテナンスのために、研究所かどこかへ帰る陽さんから、どこかの地図を受け取った。
そのあと陽さんは、4号機を車に乗せると、あっという間に視界から居なくなった。

小話　ｎｍｓについて説明（前書き）

今まで話に出てきたナイトメアシリーズの説明です。
話が進むにつれ、増えるかも。

別に読まなくても大丈夫ですが、
よく分からない人は、読んでみてはどうでしょうか。

小話　ｎｍｓについて説明

＜ナイトメアシリーズ＞
裕樹の父と、陽によって開発された、【戦闘用人工知能ロボット】。
シリアルナンバーの前には、【ｎｍｓ】がつく。
そのあとの番号は、製造番号。
何体製造されたのかは、まだ分からない。
主に種類は４種類に分けられる。

攻撃特化系：攻撃力が高い機体。そのかわり、防御はとても弱いか、防御技を覚えていない。

攻撃系：攻撃力が比較的高い機体。
　防御が、弱い。

ノーマル：防御と攻撃が同じ機体。
　攻撃・防御どちらも出来るが、逆に言えばどちらも中途半端。

防御系：防御力が比較的高い機体。攻撃は弱い。

防御特化系：防御力が高い機体。攻撃技を覚えていない場合が多い。

【今まで出てきたナイトメアシリーズ】

＜ｎｍｓ－０２＞
ナイトメアシリーズの中で、２番目の攻撃力がある。
武器は、ナイトメアシリーズに対しては大鎌。
白を基調としたボディ。

＜ｎｍｓ－０４＞
ナイトメアシリーズの中では、精神操作に長けている。
主に武器は無いが、油断すると知らぬ間に暗示をかけられている場合がある。
攻撃もできるが、主に防御系。
紫を基調としたボディ。

No．12　地図の場所

2号機と衝撃の出逢いを果たした翌日。
俺は陽さんに手渡された地図の場所に立っていた。

「で、でかい・・・」

まるで豪邸。
高層ビルのような高さはないが、横にデカイ。
建物の真っ正面に立つと、視界全てに収まりきらない。

とりあえず、建物の方に歩いていくと、玄関らしき場所を見つけた。
インターホンがついていたので、押してみると、すぐに聞き慣れた声がする。

『あぁ、少年か。今開けるから待っててくれ。』

ガチャ、と音がして、目の前の扉が開く。
「お邪魔します。」
恐る恐る、家の中に入ってみると、まるで生活感の無い空間が広がっている。
「よく来たな。迷わなかったか？」

辺りを見渡していると、後ろから声をかけられた。
「おはようございます、陽さん。」
迷子の心配をされたが、それはまったく無かった。
迷う以前に、ここらへんには建物が少ない。
そこにこんな建物が建っていたら、逆に素通りするほうが難しいだろう。

陽さんは昨日のスーツ姿ではなく、ラフな格好をしていた。
家では、結構普通の格好をしているらしい。
それでもスタイルの良い陽さんが着ると、とてもおしゃれに見えるから不思議だ。
美人は何を着ても似合うというのは本当らしい。

そんな馬鹿な事を考えながら、陽さんに連れられ、傍の階段を下りる。
しばらく歩き続けると、透明なガラスの扉があった。
陽さんが横の番号が並んだ機械の上に指を滑らすと、しばらくして扉が開く。

扉をくぐると、想像していた『いかにも研究所』みたいなのではなく、
せいぜいパソコンが3個ほど並んでいただけだった。
ただケーブルがとても多い。

「4号機のメンテナンスに、時間がかかるかと思ったが、結構早めに終わってな。
　さっき最終点検をし終わったところだ。」
陽さんが歩いていった先には、あの4号機が椅子に座っていた。

No．13　4号機

「あの・・・普通に近づいていて大丈夫なんですか？」

昨日あれだけ凄まじい殺し合いを見たせいで、
すっかり危険というイメージが付いてしまった俺は、
普通に近づいて、４号機の傍に立っている陽さんを信じられない目で見た。

「あぁ・・・。もう大丈夫だ。
４号機はマスターの命令が無ければ、暴れる事はない。」
「そうなんですか。」

陽さんに説明されて俺は、とりあえず『安心』と適当に考えといた。
おずおずと４号機の傍に近寄ると、
今まで静かに眠るように椅子に座っていた彼女が、
いきなり目を開けてこっちを見た。

「うわあっ」
思わずびっくりすると、陽さんに爆笑された。
（そ、そんなに笑わなくても・・・）

「わ、悪い・・・ククッ。
４号機には、お前が【ｍａｓｔｅｒ】だとインプットしてあるからな。
主人が傍に来たと思って、スリープ状態から戻っただけだ。
そう怯えてやると、４号機が傷つくぞ。
ちゃんと感情も持ってるからな。」

「そうなんですか！？」

ビックリだ。

さすが人工知能ロボットとはいえ、感情まで持ってるとは。

「まぁ、ホント喜怒哀楽くらいしか無いけどな。

４号機、あいさつするか？」

『はい』

そうやって、４号機は椅子から立ち上がると、俺の目の前へ立った。

『はじめまして。ますたー。

わたしはｎｍｓ－０４、エシカです。よろしくおねがいします』

そう言うと、ぺこりとお辞儀をした。

「よろしく。」

こちらもお辞儀をする。

「・・・あれ、今エシカっていった？」

何だそれ、と不思議そうにしていた俺に、

「それはナイトメアシリーズの、個体識別名称だ。

シリアルナンバーとは別の名前だな。」と陽さんが説明してくれた。

なるほど、じゃぁエシカでよんだほうがいいかな？と一応聞いてみると、

『そっちの方がいい』と言われたので、そう呼ぶことにした。

じゃぁ、２号機の方も名前があるのかな？

エシカに聞いてみたら『知らない』と言われた。

あとで本人に聞いてみよう。

・・・しかし、改めてみると、ほんと綺麗だなー。いや、可愛いか？
髪も綺麗な薄紫で、目は濃い紫だが、透明感がある。
あの暗い空間では分からなかったが、日に当たるとキラキラと輝いている。
背はもの凄く低い。体型からして小学生3年生くらいだろうか。

「・・・あー、自己紹介は終わったみたい、だな。
それでは、昨日の事やナイトメアシリーズについて、
詳しく説明する約束だったんだが、聞くか？」
「はい。お願いします。」
陽さんが椅子に座ったので、向かいのソファーに座った。
するとエシカもトコトコとついてきて、ちょこんと俺の隣に座った。
「・・・ホントに4号機に気に入られたな。お前・・・」
私にはそんなことしてくれなかった、と軽く落ち込んでいる陽さんをなだめ、
とりあえず説明してもらう事になった。

No．14　決意

「まず、何故ナイトメアシリーズの最終機を探す羽目になったのか、からだな。
実は少年に言っておかなくてはいけないことがあるんだ。
ナイトメアシリーズは最終機を入れて12体なんだが、
どうやら最終機の他に、2号機と4号機を除く、
あと9の機体も探さなくてはいけなくなったかもしれない。」

「な、何でですか？」
いきなり頼まれ事のハードルが上がったので、俺はギョッとした。
全部って、一体何体探さなきゃいけないんだ！？

「4号機との接触で、どうやらある事が分かった。
・・・自己制御システムという、マスター以外の命令では行動を起こさない、
というのが組み込まれているんだが、それが4号機は何故か作動しなかった。」
「作動しなかった？」
「あぁ。」
さっきいれていたらしい、コーヒーを飲みながら、陽さんは話し続けた。

「最終機は、まずシステム自体がまだ組み込まれていなかったから、
あの時のように暴れたら、制御するものがない。
だから、捜索や捕獲、場合によっては処分も考えていた。
しかし、4号機の場合、自己制御システムが組み込まれていたが、

作動しなくなっていた。
・・・自己制御システムを、作動させなくする別のシステムが入っていたんだ。」
「それって、わざとこういう状態にさせるために、
誰かが細工した、って事ですか？」
「・・・そうだ。」
絶句した俺を、不思議そうにエシカが見つめてくる。
なんでもないよ、と頭を撫でると、嬉しそうに笑った。
「・・・一体、誰がそんな事を・・・」
「わからない。だが、このまま放っておいたら、さらに事態は悪化する。
誰かがこんな悪趣味な事を進める前に、こちらで先に保護するしかない。
手伝ってくれるか？」

・・・たぶん、陽さんが言っている事は、すごく大変な事だ。
恐らく、何体もあるロボットを見つけて、保護する。
そのロボットが攻撃してきたら、応戦しなくてはならない。
それを、誰かが細工する前に、できるだけ早く行う。
ほとんど知識も経験もない俺には、ハッキリ言って出来ない確率のほうが高い。
でも、俺は2号機とエシカのマスターになった。

たとえ、今は非常事態を乗り切るための、かりそめのマスターだとしても。
2人がプログラムで忠誠心を誓わされているとしても。
それでも俺は、今だけでもマスターらしい事をしてやりたい。
2人の仲間が異常事態になっているのを、マスターとして見て見ぬふりは出来ない。

「・・・わかりました。
俺が出来る事だったら、何でもやります。」

そう言った俺に、陽さんは安堵したように息をついた。
「そう言ってもらえると助かる。
ただ、無理はしないでくれ。前言ったように、本当に危険だからな。」
陽さんは嬉しそうだが、哀しそうでもある、複雑な表情をした。

『だいじょうぶ』
驚いて横を見ると、エシカが陽さんをまっすぐ見つめていった。
『わたしがますたーをまもる。』

「・・・ありがとう。」
思わず涙が出そうになったが、それを何とか我慢して、エシカの頭を撫でた。
エシカは、くすぐったそうに笑っていた。

No．１４　決意（後書き）

追加情報

【ナイトメアシリーズ】
ナイトメアシリーズは全１２体。

【ｎｍｓ－０４】

設定が７歳なので、喋る時はかなり幼児っぽくなってしまう。
あと漢字とか読めない。
ただし、自分の名前はちゃんと言える。

No．15　名前

それからしばらくエシカと一緒に遊んでいた。
何だか妹が出来たみたいだ。

『ますたー、ますたー。』
「どうした？」
『あれ、なんですか？』
エシカが指さした先には、窓があった。
「窓がどうかした？」
『ううん、そのさき。』
「先？」
窓の外をよく見ると、電線に雀がいた。
「あれは雀っていうんだよ。」
『すずめ？』
「うん。」

何故こんな事をしてるかと言うと、俺らの様子を見ていた陽さんは、
「４号機はまだまだ学習途中だから、色々聞いてくると思うけど、
　出来るだけ教えてやってくれないかな？」
と頼んできたのだ。
それから、エシカに質問攻めにされている。
まだ「なんで？」攻撃はしてこないから、大丈夫だが・・・

「そういや少年、２号機はいるよな。」
「はい。」

陽さんに言われた通り、あれから肌身離さずつけている。
今日もつけてきたのだが、
「2号機も遊びたいだろうし、出してやれば？」
という陽さんの一言で、チョーカーから出してみることにした。

とりあえず、十字架に向かってしゃべりかける。
「2号機もでてみるか？」
『はい』
2号機の声が聞こえ、一瞬十字架が白く光り、目の前に2号機が現れた。
チョーカーを見ると十字架が無くなっていた。

『おはようございます、マスター。』

2号機はそう言って、ふわりと微笑んだ。
エシカも見たときは綺麗だと思ったが、2号機は日の光を浴びると、まさに【光り輝く】ようだ。
髪がまるでダイヤモンドのようにキラキラして見える。

『あー、サーシャだー。』
エシカがテコテコと2号機の方へ歩いていくと、
2号機も笑いながらエシカの頭を撫でている。

「サーシャ・・・って、それ2号機の名前？」
『はい。』
なるほど、何かイメージ通りの名前だ。

二人して仲良く遊んでいる姿を見て、俺は昨日のシーンを思い出していた。
「・・・陽さん、たしかあの2人、昨日殺し合いしてませんでした？」

こそこそと聞くアレに、陽さんはあっけらかんと、
「いや、別にあいつらは気にしないぞ？
4号機が暴走したのを止めただけ、ってイメージしか無いからな。」
と言い放った。

「そ、そうなんですか・・・」
俺は思わず頬を引きつらせた。

しばらくして、2号機はサーシャ、4号機はエシカと覚えた俺は、ついでに他のナイトメアシリーズの名前も聞いてみた。

『えっとねぇ、エシカがしってるのはね、
5ごうきのマシアだよ。』
『私が知っているのは、
3号機のメィスールと1号機のエズトラです。
あとは製造期間が違うので、よく知りません。』
「へー。何か難しそうな名前だな・・・」

日本人の名前に慣れている自分には、覚えにくそうな名前だ。
サーシャもエシカも、あまり他の機体とは喋らなかったようで、

それ以外の情報を知ることは出来なかった。

No．15　名前（後書き）

追加情報

＜名称＞

ｎｍｓ－０２　２号機　＜サーシャ＞

ｎｍｓ－０４　４号機　＜エシカ＞

他のナイトメアシリーズの名前も出てきましたが、
彼女たちが出てくるのは当分先です；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8875r/

Nightmare

2011年10月6日21時04分発行